本と地域の情報誌
県北 どらくろあ
第5号　2016年8月1日（毎月1日発行）

県北群星伝③「地方文化の伝道師」

森 一紘（もり いっこう） 57歳（安芸高田市美土里町）

道路わきの台地に、茅葺の屋根を赤いトタンで覆った小さなお堂が見えた。一本の白い柱が屋根を支えている。安置されている石像に礼拝し、六角形の台座に腰を下ろした。ウグイスが流麗な声で鳴いている。ゆったりとした時間が流れている。

三次市吉舎町敷地にあるこのお堂には伝説がある。戦国時代の武将、尼子貞久がこの地で敵に討たれた。足を三本射抜かれた愛馬は、残った一本の足でここまでたどり着き倒れた。村人は、この一本足の馬にちなんで一本堂を建立し、貞久と馬を供養したという。

「気になる建物があるんだけどね」

森一紘さん（NPO法人やまなみ大学地域自立支援センター理事長）の一言から、壮大なプロジェクトはスタートした。三次市内の南部地域を中心として、地元の人から「どうさん」と親しみを込めて呼ばれているお堂群の調査である。調べてみると、安芸・備後のお堂の多くは、三方、または四方が吹き抜けで床板が張ってあり、誰でも休んだり参拝できるのが特徴で、現存数や密度において全国有数だということがわかった。

調査の実施責任者はやまなみ大学地域自立支援センターの山本正克さんで、同センターの森さんと村上結佳さんがサポート。実施期間は、前期が平成二十二年六月から同二十五年九月、後期が平成二十五年十月から同二十六年八月。古い資料の洗い出しから、文化財保護委員や地元の郷土史家からの聞き取り、現地調査による聞きこみ等々、地道な調査活動が続いた。

ネット上で公開されている「三次のお堂群のウエブマップ」（「picasaweb 三次のお堂群」で検索）を訪問すると、写真の多さに圧倒される。実に二百二もの「どうさん」が紹介されている。各画像をクリックすると、大きな写真と共に、お堂の名称や伝承が丁寧に解説されている。これはもう学術調査のレベルである。

「単なる観光資源ではなく、その土地の文化を作る」

森さんの志は高い。表層的な観光イベントではなく、その土地独自の風物や文化を発掘、あるいは育成して、地域の財産とする。魅力のある土地には、観光客だけではなく、そこで暮らしてみたいと思う移住者も集まって来る。

森さん自身も広島市から中国山地の県境にある安芸高田市美土里町にIターン、「田舎には都市にはなくなった生活の知恵や手作りによるモノ作りの文化がまだたくさん残っている」と再認識、「中国山地やまなみ大学」の活動に参加する契機となった。

中国山地やまなみ大学は、中国山地の地域資源を活用した生涯教育や体験学習、新たな交流や文化、産業の創出を目的に、広島県と二十五市町村が参加して平成十三年に設立。同十九年にNPO法人に運営が委託。そのときに森さんもNPO法人の副理事長（同二十四年から理事長）として

事務局長に就任、中心メンバーとして活躍している。

中国山地やまなみ大学三次キャンパス協議会として、森さんが「どうさん」の前に仕掛けたのは「夕陽」。三次を夕陽のふる里にしようというコンセプトで夕陽の絶景スポットを募集、大きな反響を呼んだ。その夕陽スポットは、現在でもネット上で閲覧できる（三次・田縁通りＨＰ）。

今、話題になっているのは「どうさん」の御朱印帳。今年の三月から、代表的な辻堂を八カ所選んでスタンプを設置、辻堂巡りをしながらスタンプラリーが楽しめるという企画。三カ所以上のスタンプを郵送で応募すると（十二月二十日締め切り）、抽選で二十人に記念品を贈呈。応募ハガキ付きのパンフレットと御朱印帳がセットで、三次市観光交流課や市内の観光施設などに置かれている。

地元の人が意識したことのない魅力を「外部の視線」で発掘、ユニークな企画でＰＲする。森さんの本職である店舗や施設のスペースデザイナーとしての知識や経験、感性が存分に活かされている。山間の過疎地の強力な助っ人であり、地方文化の魅力の地道な伝道者である。

図書館員ノート①
「何かおもしろい本はない？」

今月より三次市立図書館の職員がリレー形式で図書館の仕事を通して感じたことをエッセイとして綴っていきたいと思います。

図書館見学に来る小学生からよくある質問で「図書館の仕事をしていて嬉しい時はどんな時ですか？」と聞かれたら、私はいつも「お客さんにお勧めした本を喜んでいただけた時です」と答える。

「何かおもしろい本はない？」と聞かれたら、まず「どんなのがいいですかねー」と質問をしながら性別や年齢、季節や時事も意識しつつ、自分の知っている本の引き出しからこれぞという一冊をひねり出す。本を返された時「あの紹介してもらった本おもしろかったよ！」の一言で顔は満面の笑みを浮かべ、心の中でガッツポーズ。

ふだんからたくさんの本を読まないといけないのはわかっているけれど、夜８時まで仕事をして帰った日には眠り薬でしか…。それだけでは追いつかないので書評やテレビの本の紹介番組を参考にする時もある。他館のベテラン司書さんが「新聞は下から読む」と言われことに同感した。その意味は全国紙の新聞の下面は新刊本の広告がたくさん出ている、雑誌の広告の見出しは今何が流行っているかのリサーチになる、まず最初にそこを見て、改めてゆっくり記事を見るのが習慣しているという。

三次市立図書館は朝礼で職員が本の紹介をする。それを参考に、さも自分が読んだかの様に利用者に紹介する時もある。三次市立図書館ではこの紹介本をまとめたコーナーを作り紹介文といっしょに展示している。実はこの紹介文欄が職員によって決まっている。私が三次館に異動でやってきたばかりのころは一番下が私の欄だった。

図書館ヘビーユーザーのＫさんが当時の上司に「あの一番下の欄の職員さんはだれ？」と尋ねられたと他の職員に聞いた。ある時Ｋさんから声をかけられ「あなたの紹介する本が私の好みにあうので」と言われ、そんなふうに見ていたいだいているなんて、不安な気持ちで仕事をしていた私にここで頑張ってみようと思わせてくれた一言だった。

三次市立図書館　Ａ・Ｎ

トルストイ『イワンのばか』
――「ばか正直」の無欲が呼ぶ幸運

小学6年生の時、文学の好きな先生がクラスの担任でした。人道主義の文学として「路傍の石」の山本有三や「清兵衛と瓢箪」の志賀直哉、「馬鹿一」の武者小路実篤といった作家の話を聞き、つられて小説を読みました。外国ではロシアのトルストイの話に熱が入りました。

そのトルストイの少年少女向けの小説の代表が「イワンのばか」という中編です。民話をもとにしたもので、日本の昔話にもありそうですが、読後感は全然違いました。「ばか正直」が人生の幸運を呼ぶ話でした。では、「ばか正直」って何だろうか、と考えさせられました。

あら筋を紹介しておきます。

昔、「ある国」に金持ちの百姓がいて、軍人と商人と「ばかのイワン」の3人の息子がいました。軍人と商人は一時は成功するがお金に困って、財産を分けてほしいと実家に戻ってきました。家を出たきりの2人の親不孝ぶりに怒った父親は、せっせと働くイワンに相談する。イワンは「なあに、かまうものか」と言って財産を分けました。

これを見た悪魔の頭（かしら）は、いまいましくて3人の小悪魔を呼んで、兄弟喧嘩をさせるようにと命じる。欲の深い軍人と商人はすぐに術に落ちたが、イワンはどんな悪巧みにも負けず、こつこつと働き続けます。3人の小悪魔は降参して、揺らせば兵隊の出る「麦の束」と、揉（も）むと金貨が出る「かしわの木の葉」、どんな病気にも効く「木の根」をイワンに与えて消えました。

再び無一文になって帰ってきた兄たちを、イワンは養ってやる。だが、2人は「こんな所に住めない」というので、イワンは軍隊やお金をつくって送り出します。2人はそれぞれ成功して王様になりました。イワンも王様の娘の病気を治し、王様になったが王の衣装を脱ぎ、先頭に立って畑に出るのでした。

またも兄弟喧嘩をしなかったことで怒った悪魔の頭（かしら）は、自分から出掛け、軍人には戦争をさせ、商人には金儲け話でだまして、それぞれを破滅させました。

さて、ここからです。イワンに対しては、どのように仕掛けたでしょうか。まず軍隊を持つように仕向けるが、衣食の足った人民は兵隊になろうとしません。軍隊が来ても抵抗しません。紳士に化けて金貨をばらまくが、金貨を首飾りにするぐらいでそれ以上は欲しがらない。

そこで「頭で働け」と教えようとします。イワンは、悪魔のために高いやぐらをしつらえてやりました。悪魔は、働かずに暮らす話に疲れきって、頭からはしごをとんとんと叩いて落ちた。みんなは「ははん。手ではなく、頭で働くとはこういうことか」と感心するのでした。

悪魔がだませなかったイワンの王国。私はその痛快さに感動したものです。イワンの「ばか正直」は、困った人を助けるだけではありません。何よりも無欲なところです。注目すべきは、せっせと野良仕事をすることを生き甲斐にしていることです。

小説が発表されたのは1886年で、ロシアでは国が次々と戦争を仕掛けていた時代。作者は、こんな中での平和な生き方を示したかったのだと思います。

また読んでみたい本⑤
――――少年少女たちへ

音谷 健郎

【イワンのばか 挿絵】

世界の古典文学にはたくさんの名作があります。そんな名作の中から筆者の心に残る作品を今の少年少女たちにも読んでもらいたいと思い、毎月1冊ずつ紹介していきます。

第5回目はトルストイの『イワンのばか』です。もし興味を持ったらぜひ読んでみてください。

筆者紹介：1944年、旧･庄原町生まれ。新聞記者、大学講師を歴て現在、庄原市東本町在住。大阪文学学校講師

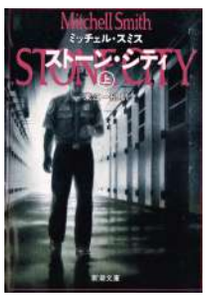
今月の3冊

どら書房の店主が毎月オススメ本を3冊選んでご紹介します。

「ストーン・シティ」

ミッチェル・スミス 著　新潮文庫

大学教授のバウマンは、酔っ払い運転で少女を轢き殺したため、二千人の凶悪犯が収容されている州立刑務所に収監される。腕力も胆力もない中年男が猛獣ばかりの檻の中で生き延びるためには、さまざまなサバイバルテクニックが必要になる。刑期を無事に終えることだけを考えているバウマンだが、所内で発生した連続殺人事件の捜査をするはめになる。



刑務所内の日常が、圧倒的な迫力でねちっこく描かれている。男ばかりの世界だが、色も恋も、ヒロインも登場する。これぞ、アメリカン・ピカレスク・ロマン。1993 年の「このミステリーがすごい!」（宝島社）で、海外編第 1 位に輝いた傑作である。

「新麻雀放浪記」

阿佐田哲也 著　文春文庫

麻雀放浪記の坊や哲が中年男になって再登場。平和な時代のばくち打ちは厄介だ。ばくちを打つにも理屈がいる。そんな坊や哲に、まだ学生の弟子ができる。その「ヒヨッ子」に語る坊や哲のレクチャーが、思春期の迷える子羊だったわたしには新鮮だった。

ばくちにはフォームが必要だ。負けているときでも自分のフォームを崩さずに維持していれは、いずれ風は吹いてくる。その風をつかむためには、常に場に張り続けている必要がある。

博才も鉄火場に行く度胸もないわたしにも、この坊や哲の言葉は人生訓として心に刻まれている。わたしにとってこの本は、思想書であり哲学書なのです。

「和菓子のアン」

坂木司 著　光文社文庫

デパ地下の和菓子店「みつ屋」で働き始めた梅本杏子は、ぽっちゃりした体形から、「アンちゃん」と呼ばれている。高校を卒業後、なりたいもの、やりたいことが何もなくて、ただ食べることが好きで選んだバイトだったが、和菓子の世界は意外と奥深くして、次第にその魅力にはまってゆく。

職場の同僚や訪問客が個性的で、ほのぼのとした味わいの人情ミステリー。おいしい和菓子を食べたあとのように、ほっこりとした気分になれます。

この作品ですっかり坂木司ファンになってしまい、猛然と坂木作品を読んでいる。坂木司がワトソン役で登場するひきこもり探偵シリーズもお薦めです。

《サンプル広告》

土井漢方薬局（平成 27 年 12 月オープン）

あなたにあった漢方薬をお作りします。また、処方箋調剤も受け付けております。足腰の悪い方にはご自宅まで配達もしておりますので、ぜひご利用ください。
東洋医学と西洋医学を専門に学んだ鍼灸師免許をもつ薬剤師が地域の皆様の健康を守り信頼されるかかりつけ薬局として誠実にご相談に応じます。

▶営業時間：９時～１８時まで　▶定休日：日曜／祝日
▶電話：0824-55-6461　▶場所：三次市南畑敷町38-4
※お車でご来店の方、「カメラのサエダ」「ムラタケ」を目印にお入りください。

「同期の桜」

――現代御伽草子⑤

亜木冬彦（あきふゆひこ）

※県北の歴史や風物を題材としたファンタジー小説です。

（これが、藤木の桜か）

どっしりと大地に腰を落とした太い幹は、長い歳月の風雪に耐えてきた逞しい生命力を宿している。鬱蒼と生い茂った枝葉は、真夏の凶暴な日差しを遮断して、根元にある小さな祠を守っているかのようだ。蝉しぐれのシャワーが間断なく降り注いでいる。

「わたしの伯母が、ここで命を救ってもらったんですよ」

道案内をしてくれた女性に話しかけた。二十代の半ばだろうか。

「嫁ぎ先の広島で、原爆に遭いましてね。夫は徴兵されて大陸に渡っていたのですが、義父母や子供三人が亡くなって、伯母だけが助かったんです。ひどい火傷でね。ほとんど意識がないまま、ここにあった小学校の校舎に運び込まれたんだそうです」

そのときわたしはまだ生まれていなくて、後年になって、原爆病院に入院していた佳也乃伯母から聞いた話だった。そのときの小学校は今は移転していて、かつて校舎があった跡地には、市民会館が建っている。ただし、市民会館の裏手にある藤木の桜の周辺は、土台の石垣を含めて、苔むした時間がゆるやかに流れている。

「祖母が、そのときのことを話してくれました」

彼女の細面で端正な顔に、意志の強そうな瞳が輝いている。

「祖母がまだ二十歳だった頃、被爆者の方のお世話をするために、小学校の校舎に通っていたそうです」

原爆で焦土となった広島では、被爆者を収容する施設も根こそぎ破壊され、山間にある田舎町の校舎にも、たくさんの被爆者が運び込まれたという。

「わたしの伯母も、あなたのお祖母さんに、お世話になっているかもしれませんね」

彼女が小さくかぶりを振った。

「何もできなかったそうです。医薬品が底をついて、傷口に塗る赤チンさえも満足に手に入らない。ただ、うちわで扇いであげることしかできなかったと、もうしわけなさそうに話していました」

佳也乃伯母からは、もっと生々しい話を聞いている。放射能で火傷したあとが夏の暑さで化膿して、傷口から蛆がわいた。それが猛烈に痒いのだ。その蛆を箸で取り除いて、冷たい井戸水に浸した布巾で拭いてもらう。そのあとでうちわで扇いでもらうと、痒さも少しやわらいで、人の心を取り戻すことができたという。

毎日のように死人が出て、校庭では遺体を焼く黒煙が立ち昇っていた……、首筋にケロイドの痕が残る伯母の話はリアルで、まだ小学生だったわたしは、その日から何度も悪夢にうなされた。

佳也乃伯母は、自分の死期が近いことを覚悟していたのだと今では思う。生前の伯母に会ったのは、その話を聞いた日が最後だった。

「わたしに医療の心得があったら、もう少し何かしてあげられたのに。それがばあちゃんの口癖だったんです。それを聞かされて育ったから、母は看護師になりました」

「じゃあ、あなたもその影響で？」

彼女が看護師だということは、道案内をしてもらう途中の会話で知っていた。かつて小学校の校庭があった場所には、庄原赤十字病院の近代的な病棟が建っている。

「わたしはダメです。注射が怖くて、予防注射のときはいつも大泣きしてましたから」

彼女が苦笑を浮かべた。

「あたし、バツイチなんですよ。子供が二人いるんで、あたしが稼がなきゃいけないんです。それで、母親に援助してもらって准看護師の資格を取りました。今でも注射は苦手です。死んだばあちゃんにはずいぶん練習台になってもらいました」

「あなたになら、わたしも練習台になってあげたいな」

柄にもなく、そんな冗談を口にした。注射痕の目立つ腕は血管が浮き出て、まだ五十代の半ばなのに老人の手のようだ。

「あの……」

彼女の表情が真剣になった。

「藤木の桜はエドヒガンで、とてもきれいな花が咲くんですよ。今度は桜が満開の四月に、また見に来てください」

わたしは、苦笑を浮かべるだけだった。彼女は職業柄、わたしの病状がかなり深刻だということを感じとったのだろうか。それだけわたしの死の影が色濃いということか。会社を、そして家庭を失って、生きる意欲を、いや生きている意味を失った。

「半年先か……」

嘆息するようにつぶやいた。

「たった半年です」

励ますような声だった。

（そういえば、佳也乃伯母さんも藤木の桜が咲いた姿を見ていない）

秋口には、岡山の津山にある親戚を頼って、この地を離れている。

「立派な桜の木じゃった。あの木の下におると風が吹いてきて、気持ちよかった。いつか、花が咲いたときに行ってみたいねえ」

佳也乃伯母のしゃがれた声が、耳元でささやいた。

「あの……」

今度はわたしが口ごもった。彼女に声をかけたのは偶然ではなかった。本当によく似ているのだ。老いた父親がこっそり見せてくれた古い白黒写真。着物にモンペ姿の若い女性が写っていた。戦友のお姉さんの写真を、無理を言って譲ってもらったのだという。

特攻隊員だった父親は、まだ十七歳で恋愛経験もなく、写真の女性を自分の恋人だと思って死地に赴く覚悟だった。

「母さんには内緒だぞ」

酒も煙草もやらず、堅物だった父親のはにかんだ顔が忘れられない。写真を本人に返しに行こう、そう何度も思いながら、太平洋に散った戦友の遺族に、生き恥を晒した自分がどんな顔で会いに行けばいいのかわからなかった、そう父親は懺悔した。

「いや、いいんです。半年後にまた来ます」

手術を受ける決心をした。彼女と再会できるような気がした。そのときに、あの写真を見てもらおう。ひょっとしたら……、そんな奇跡のような偶然を、半年間だけは信じていたいと願った。

※【藤木の桜】所在地は庄原市西本町。県有数の巨木で、市の天然記念物に指定されている。種別は野生種の「エドヒガン」で、本州、四国、九州、朝鮮半島、中国大陸等に分布し、樹齢が長く大木となる。花はやや小さく淡紅色で野生種のうちでは開花が早い。（庄原市文化財ガイドブック参照）

まちの古本屋さん
どら書房
古書探索の旅に、お立ち寄りください。

野菜の店頭無人販売はじめました！
新鮮野菜がたくさん入って１袋百円。

・無料本、百円本、50 円本などのコーナー。
　無料の漫画ルームもあります。

●庄原市中本町2−1−10　●定休日：毎週火曜日 / 第1・3月曜日
●営業時間：9:30〜19:00　●TEL: 090(9913)3052

※広島銀行庄原支店の手前（三次側から）※交差点角のまちなか駐車場が使用できます。

<広告料 1回 5,000 円 半年間 20,000 円 1年間 35,000 円>

どらくろ俳壇

誕生日八十八の夜の秋　近藤 昌平

万緑の深さに沈み体育館　原 博己

百姓の一息つくや木下闇　隆愚

短夜や十二回鳴る古時計　赤川 冬人

※投句を歓迎します。

投稿＆寄稿

「福を呼ぶお多福の面」　近藤 昌平

六月号の「神楽面の匠」で紹介された大田好二さんの作品がわが家にもある。「お多福」面を戴いている。名前ばかりの煙草屋の店内に掛けている。

数年前のことを思い出した。

若い頃、近所で下駄職人をしていたご老人が、その「お多福」面に目を留め、しばらく鑑賞しておられた。

さて、「お多福」と言えば多くの福を呼ぶ女性という意味から「多福」になったとする説が有力とされているが、一方で美意識の変化から不細工な女性を罵る言葉としても用いられるようになった。

「神楽面の匠」を読みながら、下駄職人をしているご老人は、大田さんの「お多福」面を見て、その造形の見事さに、私などの素人が気付かない匠の技を見抜いて、感動されていたに違いないと思った。

ちなみに、ご老人の奥さんは、たくさんの福を呼ぶ方の「お多福」美人なのである。

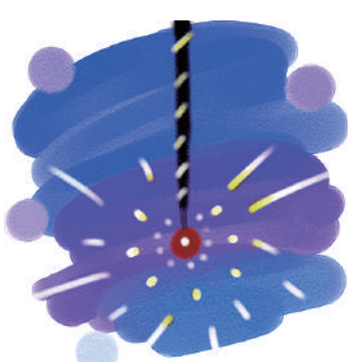
今月のどらさん

この絵をブックカバーにしています。
絵・風太

「足摺野路菊」　富久 光

五年前九日市で足摺野路菊を買った
茎の太い鉢植えの一本仕立てだった
「茎が太いですね」
さりげなく問いかける
「五年物ですよ」という
純白の小花
まだ七分咲きだった
直径四十糎ほどの見事な

一本玉仕立て
甘い香りが漂っている
少々高い買い物だったが
純白の小花　五年ものも魅力だった
普通の菊では考えられないことだ
足摺野路菊の名も初めて知った



年々大きな花茎になる
想像しただけで楽しくなる
夢が膨らむ
日当たりの良い庭先で満開になった
甘い香りに吸い寄せられるように
蜜蜂、小蜂が集まってくる
花の蜜を吸っては飛び立つ
行き先を目で追ってみるが
途中でついと見えなくなる

花に薄いピンクが出始めると
花の終わりが近い
花が萎れ葉が黄葉して萎びていく

やがて枯れ木のように
茎だけが残る
普通の菊の終わりと何ら変わらない
早くも茎の根方に新芽が
吹き始めている
鉢の内側をぐるりと囲むように
溢れんばかり
新芽が無数に育っている

《情報＆原稿を募集します!!》

●仲間募集　●教室＆講座案内
●イベント情報　●あなたの大切な本の紹介
●ボランティア・ライター（現地記者）募集！
どらくろあで地元の記事を書いてみませんか？

※応募先はどら書房・赤川まで。掲載は無料です。

『庄原メイプルラジオ』

毎週日曜日 13時～放送中!!

庄原で過ごすパーソナリティ達の何気ない日常の話と地域の情報やゲストを招いて放送する地域密着エンタメ放送!!

YouTube
和家チャンネル：

どらくろあ 掲示板

地域のイベント情報やメンバー募集など情報掲示板です。

陶芸教室

自作のお茶椀でお茶を飲んでみませんか?

■金・土・日曜日開催
■場所：県立広島大学前簡易郵便局に併設
■費用：一回500円+材料費
■連絡先：0824(74)0686 洲沢（スザワ）

― 参加者募集 ―

MTEC（Miyoshi Tennis Enjoy Club）
みよし運動公園の屋内&屋外コートで、硬式テニスの例会を行っています。
・火曜日（10:00 ～ 12:00）
・水曜日（10:00 ～ 12:00）
・土曜日（12:00 ～ 14:00）
入会金、会費等は必要なく、コート利用料だけを当日の参加者で分割負担。現在、50人をこえる会員がいて、ご自分のペースでエンジョイされています。例会だけではなく定期的にMTECの大会や他の地域のテニスクラブとの交流会を開催。興味のある方は、一度、例会にご参加ください。見学も歓迎します。
連絡先：中川（☎080-5610-2376）

どらくろあ ホームページ

バックナンバーも掲載しているので、
ダウンロードしてお楽しみいただけます。

http://shobara.wix.com/dorakuroa

編集後記

◇八月号をお届けします。いきなりの猛暑ですね。「どらくろあ」も夏休み、というわけにはいきません。今月号より枚数が一枚増えて、10ページにパワーアップしています。

◇今月号よりスタートの「図書館員ノート」、現職の図書館員の方々のリレーエッセイ、生の本音が聞けて興味深いですね。今後も楽しんで書いていただけることを願っています。

◇「同期の桜」は、わたしの母から聞いた話がベースになりました。被爆者の方の世話をしたときの間接被爆で、当地にも原爆手帖を持っている方が多数おられます。これも原爆の記憶として、書き残しておくべきだと思いました。

発行：どら書房
〒727-0012
庄原市中本町 2-1-10
☎090(9913)3052（赤川）
e-mail:touzin@sannet.ne.jp
年間購読料：2,000円（郵送費込）

誌面デザイン：ROUTE183
協賛：九日市愛好会

九日市だより

九日市の歴史④

九日市愛好会 会長　寺岡隆行

九日市復興から現在までの歩み

◆平成十四年三月九日、地元商店と外部からの出店者、協力者とで「九日市愛好会」を立ち上げました。

◆平成十四年四月八日、NHKテレビ「お好みワイド・じゃけえ広島」出演。

◆平成十五年二月九日、庄原小学校一年生が出店。

◆平成十五年、庄原小学校体育館で、児童が作った手作り品を、模擬通貨を使って「お店屋さんごっこ」開催。

◆平成十五年十月二日、臨時九日市を開催、NHKテレビの「お好みワイドひろしま」で中継放送。

◆平成十六年七月「くんちいちホームページ」を開設。

◆平成十七年十二月九日、庄原小学校六年生が出店。

◆平成十八年二月九日、「九日市実行委員会」が解散。

◆平成十八年三月五日、「くんちいちメーリングリスト」を開設。

◆平成十八年三月九日から「九日市愛好会」で運営。

◆平成十八年七月九日、RCCテレビで「九日市」の様子を放映。

◆平成二十年十月十五日、TSSテレビ新広島で、十月九日に取材した「九日市」を「満天ママ」の番組で「里山満喫満腹ツアー・イン・しょうばら九日市」として放映。

◆毎年一回か二回、日曜日の「九日市」にイベントを開催。

◆出店者は地元と近隣、中国地方や四国からも毎月四十～五十店舗が参加。

◆九日市エリアに「楽笑座」「アート多愛夢」「三軒茶屋」「まちなか広場」があり、「九日市」に合わせて、いろんな行事を開催。

◆学校関係の出店も多くありました。

庄原中学校が生徒の手作り作品の販売に出店。

庄原格致高校が牛乳を使った食品の全国コンクールで上位入賞した作品の試食の提供で出店。

県立広島大学生命環境学部が庄原産の材料でポン菓子ピザやオカラ餡のパンを試食提供と販売で出店。

庄原さくら学園が自家栽培の椎茸や野菜、自家製の菓子の販売で出店。

◆県立広島大学の学生で、「九日市」を卒業論文のテーマにされた方がいます。

◆平成二十三年には、広島女子大学の大学院生（庄原市出身）が「まちづくり研究」で「九日市」に取り組み、「くんちいちシール」を考案、実用化して商品に貼って販売しています。

◆中国新聞等の新聞に「九日市」の記事が度々掲載されて、県南部や広い地域のお客さんが来訪。市民広報にも毎月「九日市」の広告が載っています。

◆庄原市を外部に宣伝紹介する「市勢要覧」に「九日市」がトップページで紹介されています。

◆庄原小学校の授業に、社会とのつながりとして「九日市」を取り上げていただき、平成二十三年度からは毎年、九日市愛好会会長の寺岡が講師として授業に招かれています。

◆庄原小学校の学習発表会で、平成二十六年は児童皆で考えた九日市の創作劇。平成二十七年は、「九日市音頭」の創作ダンスが披露されました。

◆平成二十七年十二月九日の九日市で、庄原小学校三年生児童全員が「九日市音頭の踊り」を披露。

◆平成二十六年十一月「くんちいちホームページ」をリニューアル。

http://www.kunchi-ichi.jp

「しょうばらくんちいち」で検索。

第187回

しょうばら 九日市（くんち）

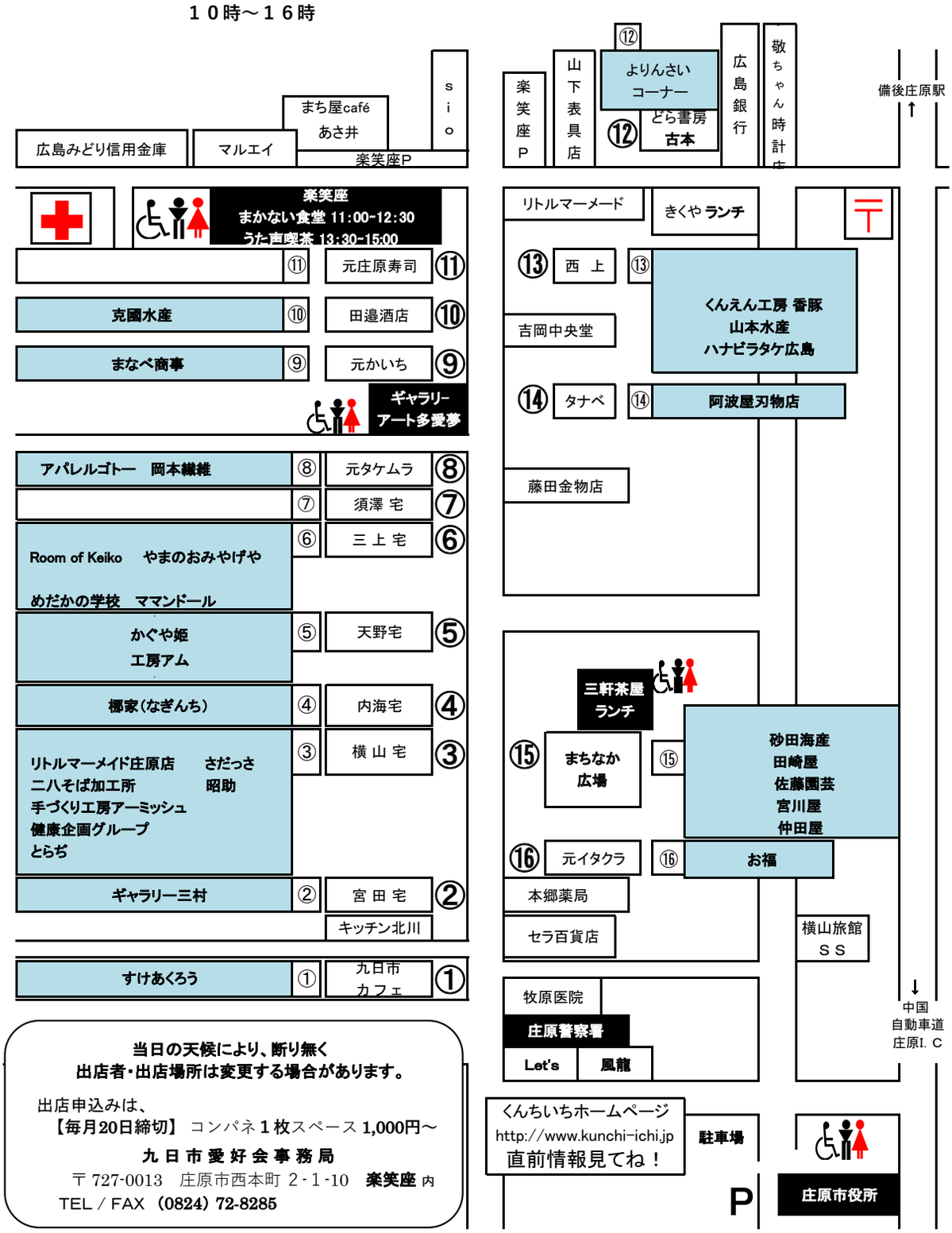
平成28年 8月9日（火） 9:00～13:00

トピックス

★風龍さん・・・・・九日市スペシャル！　餃子200円！

★市民ギャラリー「アート多愛夢」では
読書感想画展
とき　８月８日（月）～10（水）
１０時～１６時

★どら書房さん・・・営業時間　９：３０～１９：００
毎週火曜日と第１．３月曜日はお休みです



当日の天候により、断り無く
出店者・出店場所は変更する場合があります。

出店申込みは、
【毎月20日締切】 コンパネ１枚スペース 1,000円～

九 日 市 愛 好 会 事 務 局
〒 727-0013　庄原市西本町 2-1-10　楽笑座 内
TEL / FAX （0824）72-8285